

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2026年5月 NO.243



[もくじ]

- 2～3 第35回出版学術賞の審査を終えて…ヨース ジョエル
4～5 みんなが「おなじ土俵でたたかう、ということ…土谷 享
6～7 紫陽花によせて*中* 「愛人」と「愛妾」…上野智子
8～9 いまいちばんおすすめのミステリですか？ もちろんありますよ…山中由貴
10 他者に届く瞬間を見た話…上村菜々子
11 「アンテナ」濱田耕造君…下尾 仁
12～13 高知市文化振興事業団1～2月の事業から
14～15 風俗歳時記・風伯

出版学術賞の審査を終えて

ヨース ジョエル

■特別賞

中村努(中京大学教養教育研究院教授)
『地方のローカル・ガバナンス—
多元的アクターの協働空間』
(ナカニシヤ出版 刊)



今年の第三十五回高知出版学術

賞に九冊の図書が推薦された。審査委員たちは、推薦された図書を出版学術賞の要綱に示されている評価基準に照らして、出版学術賞を授与しない結論に至った。

一方、一冊のみに特別賞を授けることにした。

出版学術賞の授与を断念したのは、審査員たちがそれぞれの推薦図書に対して大きな不満を持ったからではない。それぞれの著書は一読に値し、内容面でも、形式面でも、劣っているわけではない。今後も読者の関心をひき、知識を増やし、精神の糧となるだろう。

今回、審査員たちに出版学術賞

の授賞を思いとどまらせたのは、出版学術賞受賞佳作に求められる「均衡」への懸念であった。つまり、十分な学術性を有することと一般読者の教養に資するという微妙なバランスが保たれているかどうかである。どの図書も、学術性が優れているが専門知識を持たない人にはハードルが高い、または、一般市民には分かりやすいが学術性という点では少し弱い、という批判のどちらかを免れることができなかった。残念ながら、どの図書も審査員たちの大多数を説得するに至らなかった。

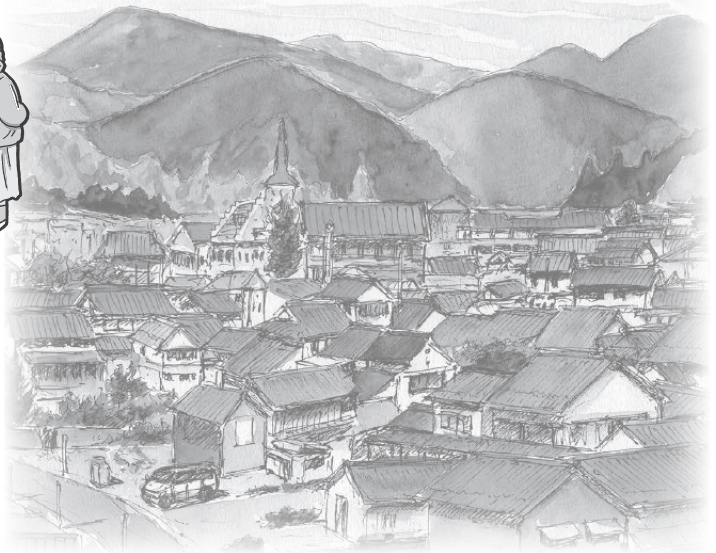
一方、惜しくも学術賞に手が届かなかったが、出版の労を称えるに値し学術教育の面で奨励に値する図書として、『地方のローカル・ガバナンス—多元的アクターの協働空間』(中村努著)に特別賞を授けることにした。本書の場合も、扱われたテーマが地域ごと・政策分野ごとに分散しており、事例間の比較分析や理論的抽象化において課題が残るといふ声があったが、学術的なレベルはおおむね保証されているといえる。そして、何よりも、市民向けの書籍として好適であると評価する審査員が複数名いた。

少子化、高齢化、過疎化——自らを「課題先進県」と称する高知県において、これらの課題解決につながるローカル・ガバナンスの構築はきわめて重要な課題であると断言してよい。本書は、高県内各地および台湾で行われた調査と研究をふまえて、このローカル・ガバナンスについて多面的な考察

を展開し、住民のニーズに対応したサービスを提供するための様々な条件を明らかにしている。行政だけでなく、地域社会の多様な主体（「多元的アクター」）＝様々な個人と団体）が協働しながら地域づくりに取り組む上での現実と可能性について、横断的に検討されている。くわえて、第6章と第7章では、日本事例との対照を意識しつつ、台湾の山間部と離島の医療提供体制と地域共同体の関係、またケアの実践とコミュニティの関係が描かれている。地理的隔絶性、資源の制約、人材不足など、高知そして高知以外の多くの地域との比較が興味をそそる内容である。市民向けの書籍として今後の地域づくりの一つの指標になりうると見て、審査員たちが特別賞を授けることにした。

高知という地域が直面している課題は、日本全国が抱える課題である。ただ、それだけではない。世界人口が無限に増加しない限り、

地球上のどの国もいずれは高齢化の時代を経験せざるを得なくなる。AIに聞いてみたところ、ローカル・ガバナンスを「役所だけがまちづくりをするのではなく、住民、NPO、企業など地域住民が一体となって、地域の課題を解決し、主体的に運営していく仕組み」と説明してくれるのである。同じ人工知能をも駆使すれば何らかの突破口が見えることも考えられる。高知で育まれていく知識とノウハウは、そう遠くない将来に世界の多くの国によって取り入れられ、活用されるようになる信じたい。多様な主体による協働をさぐる高知の人々の試みは、来るべき暮らしやすい時代の予感に満ちている。



ヨース ジョエル

一九七〇年 ベルギー国ゲント市生まれ。
二〇〇一年、ベルギーにあるルーヴェンカトリック大学で博士号を取得。二〇〇八年より高知在住。
高知県立大学文化学部教授。第三十五回高知出版学術賞審査委員長。専門は日本文化論、日本思想史。

みんなが「おなじ土俵でたたかう」ということ

土谷 享

私は二十年ほど前から「どんどこ！巨大紙相撲」というワークショップを全国各地で開催しています。全長一八〇センチのダンボール板で制作した力士を、四畳半サイズの木製土俵で戦わせる企画です。しかしこうやって説明すると、

色々と大切な部分が抜け落ちてしまい、いつも困っているのですが、本当はこのワークショップはただ作って戦うだけではなく、地域の文化資源活用のアップデートや、課題解決にもひと役買っているのです。

例えば江戸時代に天下無双と称された力士・雷電の故郷（長野県東御市）では、生誕二五〇年を記念して「雷電東御場所」が二〇一七年から開催されています。段ボールのサイズは特別に雷電の背丈と同じ一九七センチです。今では

私の手を離れ、地元の実行委員会中心に実施され、タニマチが六十件も集まる地元を象徴する催しとなっています。

また、大相撲のお膝元、東京都墨田区では二〇一九年から「北斎すみゆめ場所」が開催されています。日本相撲協会の協力のもと、大会ではホンモノの親方による実況解説や呼出の出演、大相撲初場所期間中には両国国技館の大広間に出場した全段ボール力士が展示されます。さらにコロナ禍には無観客でも巨大紙相撲が実施できるように、オンラインで土俵が叩ける「電子どんどこ」を開発しました。このシステムののおかげで、ワークショップ参加者の遠方の家族や友人も一緒に参加できるようになりました。現在も「北斎すみゆめ場所」ではハイブリッドで大

会を行っています。さらに、兵庫県洲本市で二〇二四年から開催している「洲本・五色場所」では、市内の全ての保育園と子ども園の対決が行われています。小さな集落に残る少人数の保育園から市内中心部の大きな子ども園の園児達までがオリジナル力士を携えて集結し、市長が行司を取り仕切ります。小学校に進学すると、保育園の通園区画から学区が広がり、子ども同士が馴染みにくいなどの課題を少しでも和らげようと市役所の子ども子育て課がNPO淡路島アートセンターと連携して実施しています。

高知県内では「よさこい高知文化祭2026」の主催事業のひとつとして、十一月二十九日に開催予定の東洋電化中央公園での本場所出場権をかけた「よさこい高知

文化祭場所」の地区予選が進行中です。このプロジェクトの最大の狙いは、障害の有無に関わらず子どもからお年寄りまでが「おなじ土俵」に立てることです。現実社会の中に見つけることが困難なこの環境を、文化事業によるシミュレーションによって提示することが大切だと考えています。

では、なぜこれがアートのワークショップなのか。美術史をヒントに紐解いてみましょう。みなさんは、印象派と聞いて何を思い浮かべますか？ モネやルノワールのような自由なタッチで柔らかい光に満ちた絵画でしょうか。それとも、サロンという権威を打ち破ったことでしょうか。私が重要と考えているのは、近代的な画商システムを確立させたことと、ギャラリーでの個展という方法を確立させたことのその姿勢にあります。そして特筆すべきは、彼らは作品を制作するだけでなく、個人の表現として流通させた点です。つまり、作品を一人歩きさせることを意識していました。およそ百五十年前に生み出されたこの構



鳥取県立美術館開館1周年記念イベント『三和ダンボール杯・どんどこ！巨大紙相撲〜とっとりけんび場所〜』（2026年）の様子

造は今では多くのアーティストにとって普通のことです。彼らは權威に縛られていた時代から近代に移り変わったばかりの社会の中でその構造を鮮やかに捉え直し、大どんでん返しをしたのです。こうした、大どんでん返しは現代アートに脈々と受け継がれ、一般的に云われる、現代アートの難解さ、を皮肉にも下支えしています

が、これこそがアートの面白さでもありパワーの源なのです。

次に相撲の話です。機会があれば迷わず大相撲本場所を生で観戦してほしいのですが、そこで得られる体験は、どちらかというとスポーツ観戦というより花見などに近い感覚だと思えます。テレビで相撲観戦する体験ともかなり異なります。行司や裏方が自律的に淡々と仕事をこなしている姿を生で見るだけでも楽しいものです。会場では力士の肉体がおつきり合う音が驚くほど響きます。土俵の上で神々しく見える力士たちは多くの場合、成人になる以前から親方や他の弟子達と「相撲部屋」で共に暮らし稽古に励み、四股名を親方や支援者からもらい、そこには郷里を連想する言葉が入ることもあります。国技館という聖域的な空間で、一試合一試合が真剣勝負という時間的緊張感の中、場所ごとに番付が更新され、タニマチや後援会などに支

えられ、会場に押し寄せる観客は、柵席で仲間同士で飲み食いしながら奇跡の、大どんでん返しに立ち会いたいと期待している。同じ時間にひとつの空間に集まる多様な背景の人々によって自律的に立ち上がってくる、場所という感覚。これは雑味を取り除いた近代的なスポーツの感覚とは異なります。この、場所が持つ重層的なハーモニーこそが唯一無二の文化の厚みとなっています。

私は「どんどこ！巨大紙相撲」を通じて、作品が一人歩きをしていく体験を得るために、大相撲にみる、場所という感覚をとりいれたいのです。それはなぜか。印象派が活躍した百五十年前と比べると世界は指数関数的に複雑になっていますから、捉えきれない世界に不安を感じれば、考えの近いもの同士、境遇の近いもの同士の小さなコミュニケーションに閉じこもりがちです。私自身、美術家としてアートもまた然りという反省も感じます。しかし巨大紙相撲という愉快でわかりやすいけれどちよ

と大変そうというワークショッップを結節点にすることで、普段交わることのない背景の人同士がおなじ土俵でぶつかり合います。紙相撲はアンバランスを武器にしなければ勝てないので、安定を求めると負けてしまいます。その不安定さに一喜一憂し、子どもチームが大人チームに勝つような、大どんでん返しが起こるかもしれない縮尺された社会であり、ひとときの場所。それこそが「どんどこ！巨大紙相撲」が目指す、ラディカルで愉快な世界なのです。

つちや たかし
KOSUGE 1-16
(こすげ いちのじゅうろく)

一九七七年 埼玉県さいたま市生まれ。

二〇〇一年 多摩美術大学卒業、同年より美術家ユニットKOSUGE 1-16として活動。参加型の作品を通して、人々の中に「もちつもたれつ」という関係をつくりだす。

二〇〇八年 岡本太郎賞受賞、二〇一六年より佐川町在住。

先進文明国人シーボルトが黄色人種の日本婦人を愛人にしたことを社交上不利に働くと考えたこと憶測し、「夜伽」まで持ち出す。日本女性の尊厳を著しくそこなう行為には気づいていないらしい。

呉秀三には「情人愛児」「愛人其扇」のほか、「聞く所によればシーボルト先生は此時会々病に罹りしことありて、愛妾其扇と云ふもの特に許されて蘭館に入りて看病のため付添ひたり」のように伝聞の「愛妾」と「日本に於ける愛婦友人を敬み慕ふ」の「愛婦」があり、大庭耀には「美しい長崎女を愛人として獲た」「愛人に因んだ学名をつけた」(『長崎随筆』1928/1 郷土研究社)の「愛人」がある。澤田武太郎は横浜、呉秀三は東京、大庭耀は熊本県天草、三人とも長崎出身者ではない。

ところが、「愛人」は牧野によって、次のように植物に対して使われている。

今世人がみなことごとくわれにそむくことがあったとしても、われはわが眼前に淋しからぬ無数の愛人を擁しているのです、何の不平もないのである。(『野外の雑草』1956年 94歳)

また、牧野植物園標本室長を務めた田中伸幸著『牧野富太郎の植物学』2023/3 NHK 出版)は、牧野が七二歳のとき、(中略)『研究と世間』の中で、「私は植物の愛人としてこの世に生まれ来たように感じます。或いは草木の精かも知れんと自分で自分を疑います。ハ、ハ、ハ」といつもの漫談調で語った言葉こそ、彼の人物像をよく表している (p.249)

として、次のように指摘する。

牧野富太郎にまつわる、伝説のように言い伝えられてきたさまざまな数字は、その多くに根拠がない (p.218)。費やせるだけの生涯の時間を趣味の植物研究に費やし、趣味で得た知識を自由気儘にユーモアを交えて世に伝え、前述したように他人の間違ひを見つけると、さぞ嬉しそうに、自分がいいたいことをいいたいように情け容赦なく指摘した (p.248)

この書は、第33回高知出版学術賞特別賞(審査委員長ヨース ジョエル)を受賞した。

田中は牧野の様々な限界を浮き彫りにして、一見して厳しい結論に至る一牧野の活動を通じて振り返ってみると、「植物学の世界的権威」あるいは「日本の植物学の父」という賛辞はそぐわない、と。

しかし、誤解してはならない。(中略)牧野の業績を否定しているわけではない。牧野自身の言葉を引いて、「草木の精」と呼ぶのがふさわしい、と付け加えている。(本誌 No.235)

「植物の愛人」も「草木の精」も、水仙に変えられたギリシャ神話のナルキッソスを連想させる。ナルシシズムの語源だ。ちなみに、水仙の花言葉は「自己陶醉・自己愛・自惚れ」である。

この水仙には絶えて実を結ばないこと、かのヒガンバナ、あるいはシャガと同様である。けれども球根で繁殖するから、実を結んでくれなくとも、いっこうになんらの不自由はない。そうしてみると、水仙の花はむだに咲いているから、もったいないことである。ちょうど、子を生まない女の人と同じだ。(牧野富太郎『四季の花と果実』1949 通信省)

言っているいいこと悪いことの区別がつかない、大人げないナルシストはこんな自論も吐いた。

草でも木でも最も勇敢に自分の子孫を継ぎ、自分の種族を絶やさぬことに全力を注いでいる。だからいつまでも植物が地上に生活し、決して絶滅することがない。これは動物も同じことであり、人間も同じことであって、なんら違ったことはない。この点、上等下等の生物みな同権である。そして人間の子を生むは前記のとおり草木と同様、我が種族を後代へ伝えて絶やさせぬためであって、別に特別な意味はない。子を生まなければ種族はついに絶えてしまうにきまっている。つまりわれらは、続かず種族の中継ぎ役をしてこの世に生きているわけだ。

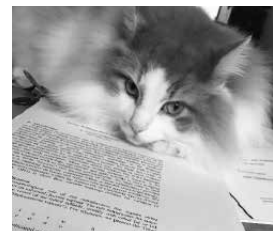
ゆえに生物学上から見て、そこに中継ぎをし得なく、その義務を怠っているものは、人間社会の反逆者であって、独身者はこれに属すると言っても、あえて差しつかえはあるまいと思う。つまり天然自然の法則に背いているからだ。人間に男女がある以上、必ず配偶者を求むべきが当然の道ではないか。(同上書「まえがき」)

13人の子に恵まれたという人物の無謀な放言を受け容れる気持ちには、到底なれない。

(続く)

下 オタクサとスエコザサ

上 シーボルト&おたきさん
(前号 No.242 に掲載)



うえの さとこ

1952年 長崎県生まれ。

1991年～2017年 高知大学人文学部・人文社会科学部在職、同名名誉教授。専門は国語学。

紫陽花によせて*中*

「愛人」と「愛妾」

上野 智子

1927(昭和2)年2月、横浜植物会の澤田武太郎が、あじさいの植物図の下に「オタクサ」の牧野説を紹介している。

【牧野云う】 あぢさゐは昔はあづさゐと呼び後にあぢさゐとなった。従来これに紫陽花の漢名が充ててあるが、紫陽花はもと支那の有名な詩人の白樂天が始めて或る山花に与えた名で、それが果してこのあぢさゐだか何だか判然たる証拠はない。それゆえ小野蘭山も早くにこれを否定しておる次第だが、しかし、蘭山の言うようにこれを秘伝花鏡の八仙花に充つるもまた考えもんだ。こんな花木は木蘭、連翹、瑞香などのようにたいてい支那から来たものが多いが、独りこのあぢさゐは何だか唐臭い姿はしておるものの、私はこれははもとと我が日本で出生したものではないかとの疑いをもっておる。シーボルトが種名として用いたあぢさゐ、即ち *Hydrangea Azisai* は、がくさう、一名、がくあぢさゐの事で普通に云うあぢさゐではない。シーボルトはあぢさゐの和名を私に変更して、我が国で目じりを下げた女郎のお滝(源氏名は其扇そのき)の名をこれに用いて大いに花の神聖を瀆した。脂ぎった醜い淫売婦と艶麗な無垢なあぢさゐ、この清浄な花はとこしえに糞汁に汚されてしまった。ああ、可哀想な我があぢさゐよ。(『植物研究雑誌』4-2 現代的表記に改めた。以下、同)

「医学は長崎から」(長崎大学近代医学史関係資料)は、この問題を次のように説明する。

愛するお滝さん(其扇 Sonogi)に捧げようとした植物の種名については、情に厚いシーボルトは科学者としての立場を逸脱しがちであった。アジサイは長崎でオタクサン花と呼ばれ市花でもある。シーボルトは美しいアジサイに *Hydrangea otaksa*、地味なガクアジサイに *Hydrangea azisai* と命名した。牧野富太郎博士は混乱を招くこの命名に憤懣があった。アジサイの現在の学名は *Hydrangea macrophylla* (Thunb.) Seringe f. *macrophylla* であり、ガクアジサイの一変種と考えられている。もう一つはクロウメモドキ属のイソノキに *Rhamnus Sono(o)gi* Sieb. と一時期命名したことがある。イソノキをソノギと呼ぶのは無理がある。後に正式に *Rhamnus crenatus* Sieb. et Zucc. と命名された。同じクロウメモドキ属の新種を牧野富太郎が鳴滝で見つけ、*Rhamnus sieboldiana* Makino と命名した。鳴滝にあるシーボルトノキである(初代は枯れて二代目)。(「シーボルトの植物学」)

牧野富太郎は、豊麗無垢の清浄な花に「可哀想な我があぢさゐよ」と言い、シーボルトがあぢさゐの和名を勝手に変更したと主張し「お滝」に侮蔑語を連発するが、「愛人」「愛妾」の語は用いていない。澤田は、次に、呉秀三『シーボルト先生』(2版1926/10 吐鳳堂)を引く。

即ち SIEBOLD が初度の長崎在留中愛妾楠本お瀧と云ふ婦人があり SIEBOLD は常に彼女をおたくさ OTAKSA と呼んでゐた(348頁)(p.45)

だが、348頁に「シーボルト先生の情人愛児」「長崎に於て同棲し居たる婦人」はあるが、「愛妾楠本お瀧と云ふ婦人」はない。これは澤田の要約で、『植物研究雑誌』には350頁の図を載せ、図の題を「其扇の像(シーボルト先生「日本」所載)」から「シーボルトの妾楠本お瀧」に変更し、左端には(あぢさゐのくさの名となるお瀧さん闇に咲く花明るみに出づ 結網子)と牧野作歌一首を添える。どちらも原題にない「愛妾」「妾」を加えた、誤解を招く澤田の引用改竄と見られる。「愛人」はどうか。

兎にも角にも当時の先進文明国人 PHILIPP FRANZ VON SIEBOLD は或は黄色人種の日本婦人を愛人にしたことが社交に於ける大いなる Handicap になるので自己の榮譽に対して此一事に就ては口を噤まなければならなかったのではなかったのであろうか、否か

それなのに WILSON は Japanese scholars fail to understand なんて馬鹿なことを放言したものだ 日本分類学者如何に賢明なりと雖もシーボルトの夜伽の名まで知ろう筈はない(p.46)



いまいちばんおすすめのミステリですか？ もちろんありますよ

山中 由貴

とにかく現役の法律家が描く事実から着想を得た事件とあってリアルティがある。そして法の空隙を突いたオチがあまりにも鮮やかで、唸るわ感嘆するわ感嘆するわ鳥肌立つわの見事な切れ味なのだ！

たとえばこんなケースがある。「塩」という第4の事件だ。

大学生のゼルマが好きになった男には妻と子どもがいた。その男パトリックはやがて妻と別れ、ふたりは同棲するようになった。パトリックは元妻と、子どもの共同親権と交代での監護権をかけての争いに勝ち、その結果、一週間おきに娘のキーラがふたりの住まいにやってくるようになった。

はじめこそキーラがくる週は三人で過ごしていたが、そのうちパトリックはキーラの世話をゼルマに任せ、ほとんど家に寄りつかなくなつた。わがままな四歳のキーラに振り回され、大学の勉強もままならず、友人からも孤立し、精神的に限界を迎えたゼルマは、あ

切れ味の鋭いミステリが好きだ。しかし好きだからとミステリを漁れば漁るほど、パターンが読めてくるのは悲しいことだ。それまでに読んだ作品から、どうせこんなオチなんだろうとか、ここは描写が細かすぎるから伏線だろうとか、この感じのいい登場人物がじつは黒幕なんだろうとか、察しがついてしまう。べつに予想が当たりにたくなんでない。犯人の目星はつきたくない。読めば読むほど欲求は果てしなく大きくなってゆく。自分の読みを外してほしい。外したうえでさらに上をいって唸らせ

てほしい。そうだ、唸りたい。感

嘆したい。驚嘆したい。鳥肌が立ちたい。

という感じで嫌な読み手になりつつあるのだが、ありましたよ今年も。「すげえええ！」と思えるミステリが。

エリーザ・ホーフエン著、浅井晶子訳『暗黒の瞬間』（東京創元社）だ。

三〇年以上勤めてきた刑事弁護士の仕事に幕を下ろすことにしたエーファ・ヘアベアゲン。六〇歳の代の彼女は文学教授の夫ピーターとふたり暮らした。凄腕で知られるエーファが手掛けてきた事件の

なかでも、とくに忘れがたい九つのケースが記録されているのが、この『暗黒の瞬間』というわけだ。ときに悔恨や葛藤をにじませながら記される事件の顛末に、それぞれるように次第にのめりこんでしまう、中毒性のある連作短編集だ。著者、エリーザ・ホーフエンはドイツ、ベルリン生まれの法学部教授で、裁判官でもある。この『暗黒の瞬間』はミステリ作家としてのデビュー作だ。え、デビュー作にも秀逸な起承転結ぶりに、洪みと老練さを感じていたけれど???

？

る過失からキーラを死なせてしま
う。

ゼルマの裁判で弁護をすること
になったエーファは、自責の念で
苦しむゼルマを救うため、知恵を
絞るが……。

裁判の最後に「おっ」となる展
開と、エーファの弁論の説得力が
冴える作品で、一気に著者への信
頼度が増す良作だ。

もうひとつ、第7の事件「強姦」
は、九つの作品の中でもずば抜け
ていると思う（が、タイトルのと
おり嫌な事件なので読みたくな
方もいるかもしれない）。

少女を集団で強姦した十一人の
男たちが被告人となったが、十一
人のうち一人だけ、犯行には加担
せず帰宅したアリバイがある。男
たちはみな無実の一人は自分だと
主張し、少女はその一人をある理
由から特定できるはずがない。無
実の人間が誰かを特定できないな
ら、ほかの十人に無罪の可能性が
残り、法倫理上、誰ひとり罰する
ことはできない――。

疑わしきは罰せずというルール

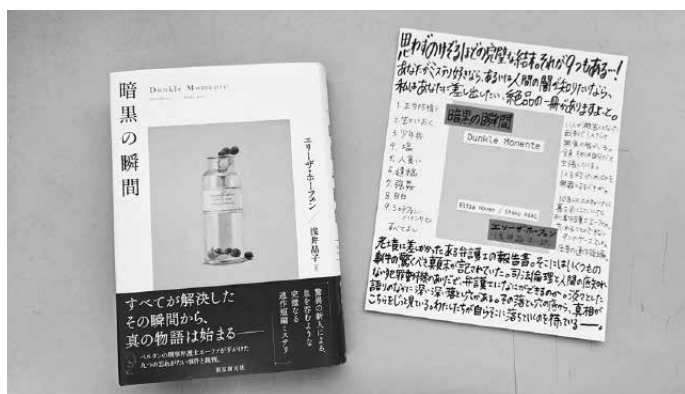
に従って十一人全員を無罪とする
のか、無実の人間をそうとわかっ
ていながら刑務所に送るのか。

法律上のジレンマをかくくぐる
ようにしてもたらされる予想外の
結末には、心からのため息が出た。
これは想像してなかった。それな
のに整合性があつてぐうの音も出
ない。お見事……。いろんな感情
が入り混じった満足のため息だ。

そのほかの短編もどれもほんと
うに素晴らしい出来だ。いやほん
とに、こんなのが読みたかったん
だよ！と力いっぱい言いたくな
るような質の高い作品ばかり。思
わずのけぞるほど切れ味抜群で完
璧な結末が九つもあるのだ！

ここで例に挙げた事件も、その
ほかの事件も、エーファが快刀乱
麻でどんでん返しを起こすと、そ
爽快な大団円をむかえると、そ
んなタイプの物語ではない。むしろ
エーファの掌握しきれない事態
に展開して苦みがあとに残るよう
な、そんな結末がほとんどだ。

法律に、さまざまな事情をかか



える人間を選び分けたり、罪の重
さをはかったり、救うことなど
できるのか。淡々としたエーファの
記録が、彼女のそういった疑念を
浮かび上がらせる。しかしまた、
各章で肅々と事件のファイルを開
じていくような文末に、法のもと
でできることはやったという静か
な自負もうかがえる気がする。

人が罪を犯す、もつとも暗い瞬

間を描きたかった、と著者はいう。
ほんの一瞬、暗い感情が浮かび上
がり、犯罪という落とし穴に落ち
てしまう。その落とし穴の底を、
わたしたちはエーファと覗き込む。
その暗黒の中から、真相がこちら
をじっと見ている。わたしたちは
ぞつとしながらも、その真相に魅
入られて読むのをやめられない。
そう、わたしはこんな仄暗くて
美しいミステリに心底うっとりし
てしまうのだ。

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。
TSUTAYA中万々店の書店員
なかましんぶん編集長としてX
やっています。
好きな本について喋るときだけ
饒舌になります。

他者に届く瞬間 を見た話

上村 菜々子

自信が持てなくなつて「わたしアートじゃないのかも」と口にしたら泣いてしまった。そのとき私の前に座っていたのは写真家の杉本春奈だった。二人で生み出した作品が大賞に選ばれたとき、高知の芸術の文脈に光を置くことができたと思つた。

高知に生まれみかん農家の娘として育ち、中学の頃には絵を描くのがなんとなく好きで、高校での選択科目も美術を選択し、美術予備校へ入り美術大学へ進学した。

それまでに鑑賞したのは、高知県立美術館で開催された有元利夫展とクロード・モネ展のみ。美大に進学したあと、同期たちと話し歩いていくうちに自身の芸術体験の少なさを自覚した。とくに大学院は東京の方で、オルタナティブだとかエッセンシャルだとかインスタレーションだとかの専門用語を標準語で浴びせられ、ダサくて田舎モノのわたしは心を閉じ、材料研究に没頭するばかりの学生時代と

なつた。

杉本とは二〇一五年に出会い、はじめて共作を発表したのが二〇一八年。『描く』ことと『撮る』ことを素材に、平面作品のシリーズを作り展示した。それからは、会うたびに新作の構想を語り合う。

彼女が提案する店がなぜかスイーツが美味しい店ばかりなので、甘味を摂り近況を共有し、二人で作り出す作品は一体なんなのかを話し尽くすことを重ねた。

二〇二五年、「柴田恵子芸術振興基金 高知若手作家育成事業 合同企画展」のための打ち合わせは自宅からオンラインで行つた。杉本は「このケーキ変じゃない？」と送つてきた、苺のショートケーキの写真を使いたいと話し始め、内観をテーマにした作品『Introspection』の制作が始まつた。

杉本との対話は表面的にならないうちが努めた。わたしたちは大人になるとともに、弁えて立ち入りすぎないように話す癖がついている。それを取り払って二人が向き合えないとこの作品は成立しない。そうして今回の制作は少女だった頃の杉本の小さく確かな光を、だれかに伝える作業だと気づくことができた。これを二人が培った表現方法の全てを投じて構成していくことで成立させるとしたら、

空間演出形式のインスタレーションという方法が適切となる。それは二人にとって初めての試みだったが長い対話が土台にあるので思つていたよりも捗つた。

と、そこでいつかアートに心を閉ざしたみかん農家の娘ができた。来場者のほとんどはアートを『体験』として触れる機会の少ない高知の人だ。この作品は鑑賞者が入つて初めて完成する。展示中にも鑑賞導線やキャプションの工夫・調整を繰り返し、無事、鑑賞者が介在する風景をみることでできた。

審査員の日沼禎子氏が私たちの作品をリレーショナルアート（関係性の芸術）と位置付け、大賞に選んだことは高知に近代の芸術体験を提案することだったのかもしれない。

「アートはわからん」と時々言われてしまうけれど、わからないことだからと放っておくと、知られていない未来になり、知られていないということは無いことと同じになる。子どもたちが広い世界を知りたいと高知を出た時に、格差を感じてしまわぬようにと願う。だからこそ、今を生きている同志たちの圧巻の大作絵画や、小さくとも多彩な世界観で埋め尽くされた展示が並ぶこの企画展自体が

そのことに働きかける取り組みで嬉しかった。同じく全身全霊で制作したであろう参加作家たちのことを思うとなんだか涙が止まらない。

なにより、ぶつかり合いに感じてくれ作品の精錬を共にしてくれた杉本春奈の存在が私の励みだ。ありがとう。

なにかに当てはまらないちっぽけな自分に涙してしまうより、目の前にいる誰かが存在する世界と一緒に確認することができればアートじゃなくなつていいのかもしれない。

※上村菜々子と杉本春奈で組んだ「Topography」は、令和7年度「柴田恵子芸術振興基金 高知若手美術作家育成事業」で大賞を受賞した。

かみむら ななこ

一九八八年香南市生まれ。多摩美術大学修士課程美術研究領域修了。

画家／アーティストとして活動中。県内外での展示販売の他、テレビスタジオや飲食店などの内装絵画の依頼制作を行っている。

Instagram: @kaminurananako
@nanako_artworks

「ファンテナ」

濱田耕造君



下尾 仁

カフェの営業中に高校時代の同級生、たけっちゃんから電話がかかってきた。何気に電話に出ると声のトーンが低く、一言、「こうぞうが死んだ」と言った瞬間、頭が真っ白に。偶然こうぞうのお姉さんに会い、亡くなった事を聞いたぞうだ。お葬式は終わっており、「明日、お線香をあげに行くけど一緒に行かん？」と。もちろん行くぞうとはここ何年も会っていないが、高校の時はよく遊び、卒業してからも富士山に行ったり、バイクで北海道を一周したりする仲のいい友達であった。

彼とのエピソードはたくさんある。高校はバイク禁止だったが、僕は中型免許を取得し、ほとんどの友達にバイクを所有していた。僕が免許を取るきっかけも彼である。誰よりも早く免許を取得し、単車を持ったこうぞうは、「室戸に行くけど後ろに乗ってく？」と誘ってくれた。初めて単車に乗った僕は、風を切って走る疾走感、すれ違う別の単車とのピースサインのやりとり、まるで別世界に行ったような感覚に魅了され、僕も自分で運転がしたいと思った。それからすぐに免許を取得した。それがすぐにバイクに明け暮れていた夏休み最後の日の前日、こうぞうが今から高松に行こうと誘ってきた。またまた単車の後ろに乗り、高松へ。夜中に着き、何をすることもなく漫画喫茶で夜を明かし、朝高松を出発。ほんとになんだったんだらう。帰り道、大豊辺りで、こうぞうのバイクがふらふらしだし、後ろに乗っている僕はどうする事も出来ずガードレールに激突。何とか転倒は免れたが僕は足を強く打。激痛が走った。が、こうぞうの足を見ると膝の辺りがえぐれて

血みどろ。その瞬間、僕の痛みは吹っ飛んだ。後ろを走っていた車がすぐに病院に行った方がいいと医大病院に連れて行ってくれた。残された僕は、こうぞうの単車を運転して帰ることになったが事故直後での初の公道運転は恐怖でしかなかった。夏休みが終わっても、しばらくこうぞうは学校に来れなかったが、僕は何も言えずにいた。怪我も完治し、元気に学校に来た時はめっちゃ嬉しかった。こうぞうを語るうえで外せない話がある。高校の時、夜、高知を出航して朝、大阪に着く大阪高知特急フェリーという船があり、それに同級生の女の子三・四人が乗って大阪に遊びに行くので、こうぞうを含め友達と見送りに行く事になった。フェリーは出航し、僕らは友達の家が集まった。するとこうぞうが、さっき行った中の一人の事が好きやと言出した。「これから大阪に単車で向かって、朝のフェリーがついた時に、オレがおつて告白したらカッコよくない？」と言った。冷やかし半分「それ凄いやん。」と、皆は各々カンパを渡し、フェイトと送り出した。今みたいにナビもなく、地理もわからないまま勢いだけで飛び出すこうぞうは、無鉄砲バカだ

けど、物事に純粹で、キラキラ輝いて見え、本当に凄いやつだ」と思った。後日、「どうだった？」と聞くと、友達の家で結果報告会。フェリー到着に間に合ったが、女の子から、「なんでおるが？」と言われ、告白は出来ないまま、帰りのお金が無くなった。こうぞうは女の子からお金を借りてフェリーで帰ってきた。との事であった。集まった皆は大爆笑。流石、こうぞう。

そんな友が五十五歳の若さで天国に行くなんて悲しすぎる。お線香をあげに行つた時にお母さんに話を聞いたら、晩御飯を食べている時に急に倒れ、救急車で病院に行つたが、帰らぬ人。心筋梗塞だったらしい。

お前はいつも突然やね。でもお前がおつたとき、最高に楽しい高校生活が送れた。出会えて感謝や。大好きな友達、こうぞう。そつちに行つた時には、いろいろ連れて行ってや。

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

1 ~ 2月の事業から

●柴田恵子芸術振興基金

高知若手美術作家育成事業

― 合同企画展 ―

高知市の実業家・柴田恵子さんからの「芸術の担い手育成」などを目的とした高知市への寄附金を活用し、昨年度、新しく「柴田恵子芸術振興基金 高知若手美術作家育成事業」を立ち上げました。内容は、特設のスペースを活用した展示プランや作品を公募し、二度の審査を通過した十組の作家に制作支援金を支払い、十組合同での展覧会を開催。会期最終日に行う審査で大賞を選び、大賞受賞者には賞金を授与するという二年間かけて実施するというものです。

二〇二五年三月末までに壁三面で構成するコの字型の展示スペース（間口7m×奥行3.5m×天井高6m）を使った展示プランを公募し、四月十日に書類審査となる一次審査、六月七日・八日に各作家が自身の展示プランや作品についてプレゼンと審査員との質疑応答を行う二次審査を実施し、合同企画展に出品する十組の作家が選ばれました。

合同企画展は、かるぼーと七階B1 LBOギャラリー第一・第二展示室で

二〇二六年一月二十日～二十五日の一週間開催し、作家の皆さまの力と工夫の賜物で、どの展示スペースにも力作が並び見応えのある、一つの会場で十の個展を一気に鑑賞するような展覧会になりました。展覧会の最終日には、審査員が

実際の展示を見ながら作家との対話による最終審査を行い、画家の上村葉々子さんと写真家の杉本春奈さんによって二〇一六年に結成された「トポスグラフィア」[トポスグラフィア]が大賞に選ばれ、賞金五十万円が授与されました。

審査にあたっては、一次審査を行った高知県立美術館の塚本麻莉学芸員や二次審査と最終審査を行った女子美術大学の日沼禎子教授も大変悩まれていましたが、特に最終審査は、力作を前に、日沼教授がとても頭を悩ませる大変難しい審査で、作家の皆さんのレベルの高さを実感しました。また、大賞を受賞できなかった作家の悔しそうな様子を見かけたり、今後の活動についてお話を溢れ出るアイデアをうかがっていると、今後もどんどんレベルが上がりが審査が難しくなるのだろうと感じています。

審査前の作品や展示に対する主催者の関わり方など運営面で今回悩んだ点や、実際に開催したことで出てきた次回への改善点についても、作家や来場者からいただいた様々なアイデアを参考に工夫を重ね、より良い事業となるよう二回目の実施に向けて準備を進めたいと思います。

会場 高知市文化プラザかるぼーと

B1 LBOギャラリー 第一・第二展示室

日時 二〇二六年二月二十日～二十五日
来場者 六五五名



高知市文化振興事業団

ステージラボ高知セッション

ステージラボとは、全国の公共ホール、劇場の職員及び地方公共団体の芸術文化担当職員を対象にした研修事業で、地域の芸術文化を担う人材の育成と地域間の相互交流の促進を目的として一般財団法人地域創造が主催となり開催しています。ラボ(実験室)という名が示すとおり、ワークショップなどの体験型プログラムやグループ討論による双方向のコミュニケーションを重視し、少人数形式により実験的な試みを行う、他にあまり例をみない研修です。1年に2回、全国の公立文化施設を会場に実施しており、令和7年度は7月に茅野市民館・美術館(長野県茅野市)、令和8年2月に高知市文化プラザかるぼーと(高知県高知市)で実施されました。

高知セッションでは3コースが開設され、ホール入門コースに16名、自主事業

コースに13名、公立ホール・劇場マネージャーコースに18名、全部で47名の参加者が全国から集まりました。

ホール入門コースでは、演出家・俳優・劇作家の有門正太郎さんが中心となつて講師を務め、公共と公立の違いや舞台用語の基礎を学んだほか、高知のゆるい歩き方『こ・う・ち』の冊子作りと発表にグループで取り組み、創作体験を通して全国に仲間を作りました。

自主事業コースでは、長野県上田市で小劇場「犀の角」を運営される荒井洋文さんのコーディネートの下、地域へのアプローチや福祉との協働、公共と民間の連携についての取り組みなどを学びながら、それぞれの劇場で直面する悩みを共有し、課題解決に向けてのグループワークを重ねました。

公立ホール・劇場マネージャーコース

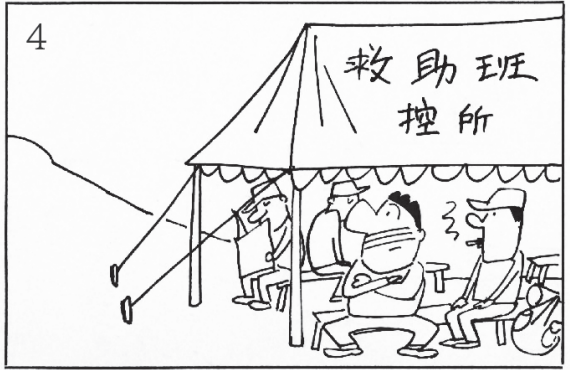
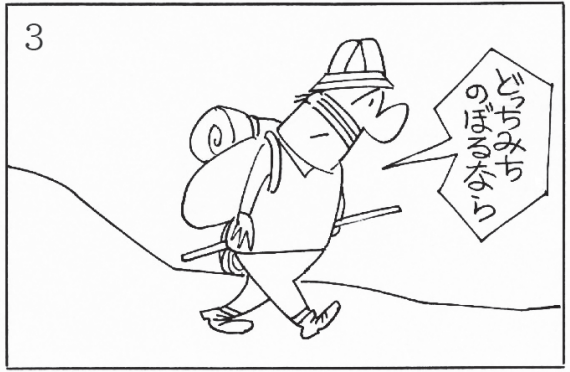
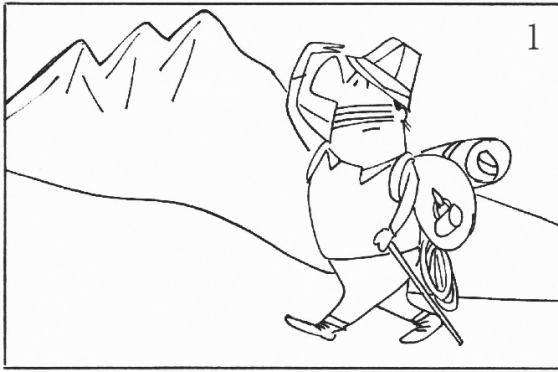
では、京都芸術センター副館長の山本真由美さんをコーディネーターに迎え、多くの参加者が課題としてあげた組織内の人間関係の構築や、行政及び関係団体との連携の在り方について、実体験や実例を元に活発なディスカッションを行い、課題解決の糸口を得ました。

4日間を通して、高知の食やお酒も堪能した全国の仲間は、地域を越えたネットワークをより一層深め、それぞれのホールが抱える課題に立ち向かう新たな活力を胸に、帰路につきました。

開催日時…令和8年2月24日(火)

2月27日(金)

参加者数…47名



フクちゃん

©横山隆一／横山隆一記念まんが館 (1965年)

それは好きな店だった。カフェレスト・H。

教師になってから六年ほどの間、よく通っていた。木を豊富に使った落ち着いた内装で、若々しくチャージングなママが洗刺と働いていた。飲み物の他に美味しいランチがあった。なによりもよかつたのは、テレビを置いていないことだった。日曜日には昼食をとり、一杯のコーヒーをすすりながら、何時間も静かに本を読んでいた。

ついに、ママと話を
する機会はないまま、
私は引越した。それ
から四十年にはなるだ
ろうか。定年で退職し、
実家の整理に通いなが
ら近くを散歩するうち、
カフェレスト・Hと再
会した。

驚いたことに、店の
たたずまいは全く変わ
っていないかった。まる
で、時間が止まっているようだった。
：ただ、コロナ禍の最中だった
ためか、客の気配は感じられなかつた。
店の中はどうなっているだろう
か。昔のままだろうか。知るのがこ
わい気がして通り過ぎた。

次に店の前を通りかかったとき、
小さな黒板が立てられていた。「テ
イクアウトできます」とあり、いく
つかの品目が書かれていた。相変わ

カフェレスト・H



風俗歳時記

らず客の気配はなく、やはり入らず
に通り返した。
それから一年ほど経った。コロナ
が明けて、街に活気もどり始めた
ときだった。
ある日、Hへ行こう、という気持
ちが勃然と湧いた。店は今どうなっ
ているだろうか。久しぶりに、あの
落ち着いた店の中で、ゆっくりと本
を読みたい。

店が近づいて来る
にしたがって、胸が
どきどきした。建物
が見えてきたとき、
なんとなく、前を通
りかかったときとは
違う雰囲気を感じた。
そして前に立ったと
き、衝撃を受けた。
店はなくなり、別の
建物に変わっていた。
しばらく茫然とそ
の前に立っていた。
あのとき、思い切っ
て店に入るべきだっ

た、という後悔が鋭く胸をついた。
けれど、不思議なことに、カフェ
レスト・Hですごした時間は、前よ
りも鮮明に蘇るようになった。あの
とき読んだ本。その内容。そのとき
の自分の未熟な思いまで。

店に入らなかつたことは、よかつた
のかも知れない。淋しいけれど、
そんな気もしないではないのである。
(本の虫)



らくだ

JEAN RENO

Solo performance

問 高知市文化振興事業団
088-883-5071

2026.6.27sat OPEN/13:30 START/14:00
高知市文化プラザかるぼーと四国銀行ホール

ぼくの名前はラワン

【バリアフリー対応日本語字幕での上映となります】
© Lawand Film Limited MMXXII, Pulse Films, ESC Studios, The British Film Institute

僕にとって
(言葉)は
(自由)を
意味するんだ。

NAME ME
LAWAND

第209回

市民映画会

6月23日 火

上映時間
ぼくの名前はラワン
①11:40 ②15:50 ③19:45
ひとつの机、ふたつの制服
①13:40 ②17:45

高知市文化プラザかるぼーと 四国銀行ホール

【入場料】一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞いただけます。
一般券1,500円、割引券1,200円(映画会当日のみ会場販売)
※学生証、長寿手帳、障害者手帳等をお持ちの方は割引
【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

弔電

遺影の父はデジタルだった。祭壇のモニター画面に父が映っている。三年前の母の時はまた紙焼きの写真だった。これからの時代はお寺で法事をする際、デジタルのモニターを抱えていかなければいけないのかと思ったら、昔ながらの遺影も入口の思い出コーナーの隅に置いてあって安心した。

満九十四歳で父が亡くなる前の月、病院に救急搬送されバタついた日が続いていた師走に、旧知の新聞記者から原稿の依頼があり、「ウマ年に向け、明るい話を書いて」。

迷ったが、往時高知県旧葉山村にいた別人のかっこいい馬乗りを取り上げて、同村出身の父のイメージを書こうと思った。父は葉山では「走っても一番、勉強も一番」で、父の若いころ

の写真はまるで映画俳優。その血統がまったく私には継承されず、弟にきた。中学の卒業式も高校の卒業式も、帰宅した弟の学生服にはボタンが一個もなかった。凡人の私は「どうした、ケンカでもしたのか」とボケていた。

私は喪主だから、葬式でマイクの前に立たないといけないのだが「高知新聞に『葉山男、馬を飛ばかす』書きました、読んでください」などと宣伝みたいな挨拶を口走る始末で、困って話の中途、弟に「あと、頼む」と替わってもらった。兄弟並んでお辞儀した。

弔電台紙が八通きて、内五通が議員さんからだった。与党だけでなく野党の議員さんからもきた。九十四の男性の葬式はもう友達も先に逝ってしまった列席者も多くな、私はすなおにうれしかった。少なくとも殺風景なデジタルの遺影よりは数段思いがこもっていると思う。

(三)

わかっただ。
やまもろ
聞つき。

One desk
Two uniforms.

90年代台北。
夜間部の私が同じ机を共有したのは、全日制の可愛くて優秀な彼女だった。

Renaissance Films Ltd. All Rights Reserved.

ひとつの机、ふたつの制服

今号の表紙

「渡る季節」

濱口 心結

鯉のぼりとヤイロチョウを配置し、さわやかな5月の訪れを感じさせるようなものにしました。

(はまぐちみゆ/
龍馬デザイン・ビューティ専門学校2年生)

Independants 第78回高知市文化祭

表玉

KOCHI SHITEN

高知市展

第78回

絵画(洋画)/日本画/書道/先端美術(立体)/彫刻/陶芸/工芸/写真/ペン字/デザイン/北見市美術交流作品

会期 2026年5月23日[土] ▶ 6月7日[日]
午前9時 ▶ 午後6時(月曜休館) 初日 午前10時開場 最終日 午後4時終了

会場 高知市文化プラザかるぽーと 7階BILBOギャラリー

入場料 : 前売 300円 [当日400円]

療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳の各所持者とその介助者1名、及び65歳以上と高校生以下は無料

前売券販売所 かるぽーとミュージアムショップ 088-883-5052
高知県立美術館ミュージアムショップ 088-866-7653

作品搬入 日時 ▶ 5月17日[日]・18日[月] 午前10時~午後5時 場所 ▶ 7階BILBOギャラリー **出品料** 1部門につき一般1,500円/学生1,000円

※お問い合わせ: 公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071 ■主催: 高知市県代表委員会・公益財団法人高知市文化振興事業団・高知市
■共催: 高知新聞社・NHK高知放送局・RKC高知放送・MUTVテレビ高知・KSSさんざんテレビ

*4月1日より地下駐車場の料金が100円/30分(上原800円)に変更になりました
デザイン: 小松奈津子・吉村勝己(合作)